

## 平成28年度外部評価委員会議事録

### 徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター

#### 1. 日時

平成29年3月28日（火）14:00～16:00

#### 2. 場所

徳島県自治研修センター1階まなびーあるーむ

#### 3. 出席者

外部評価委員会委員

田村委員長、友滝副委員長、川上委員、喜多條委員、宮本委員  
政策研究センター職員

山本所長、阿部副所長、川口主任研究員、岸本研究員  
関係部署職員

新居主事（統計戦略課）

杉本補佐、森主任主事（南部総合県民局経営企画部）

西岡補佐、時谷主事（西部総合県民局企画振興部）

金原補佐（文化の森振興本部文書館）

吉田教授（徳島大学地域創生センター）

長谷川准教授（徳島文理大学学生部）

近藤教授（四国大学生生活科学部）

#### 4. 委員会実施概要

開会挨拶 山本所長

評価基準、評価結果の取扱いについて

平成28年度調査研究報告及び質疑応答

平成29年度調査研究テーマについての助言・提言

#### 5. 議事概要

##### 議事1「評価基準、評価結果の取扱いについて」

(1) テーマ性、ニーズ把握、(2) 研究の内容、(3) 研究の活用の3つの視点ごとに各委員（6名）が、「5 非常に優れている、4 優れている、3 普通、2 あまり評価できない、1 評価できない」の5段階評価で採点を行い、委員全員の採点結果の小計と全評価項目の合計、併せて委員からの所見の代表的なものを公表することについて、各委員から了解を得た。

## 議事 2 「平成 28 年度調査研究報告及び質疑応答」

### 1) 徳島の高校生の進路等に関する意識調査研究に関する質疑応答

- D 委員 : 回答数が非常に少ない。回答期間が 9 月 10 日から 10 月 14 日であれば体育祭や学園祭を実施している時期と考えられるので、学生が興味を示す時間が無い。アンケート式を継続するのであれば、工夫の必要がある。また、もう少し全県下からある程度の回答が出てこなれば調査結果の妥当性が危うい。今の高校 2 年生の実情を知れたことに関しては良かった。
- B 委員 : 私も同じく、偏りがあるなど感じた。例えば定住という項目があれば、何故徳島に定住しないのかという WHY の部分を聞いて欲しかったかなという部分はある。
- A 研究員 : 後の質問で徳島の良いところと悪いところを問う事項があるのでそこでカバーできていると考えている。
- B 委員 : 地域別というところで、県西・県南地域をひとまとめにしているが、これはかなり特性が違うように思う。東部についても徳島市周辺を一括りにしているので、地域別で定住の意識調査をするのに、この前提がどうかと。また、都市規模を、大都市、中枢都市、小都市、というふうに区分けする必要があるのかなと思う。
- A 研究員 : もうざっくり、都会・田舎とする方が良かったか。
- B 委員 : そこまでではなくても、イメージ的に、大都市は例えば東京・大阪などで、中枢は指定都市というふうに。
- A 研究員 : 選択肢のところには東京・大阪、名古屋とか広島と、という形で書かせて頂いている。
- B 委員 : むしろ都市を区分するのではなく、徳島でいえば農村だとか漁村だとか、田舎にも色んな種類があるので、そちらの方を区分けした方が良かったのかなという感想である。
- A 委員 : アンケート調査の場合は、その問題に興味のある者が回答するというのが留意点の一つに挙げられるので、その意味からも、回答結果に若干の偏りがあるという可能性を踏まえた上で考察をして頂きたい。もっとたくさん広くデータを取れたら良かったと思う。

### 2) 建物悉皆調査を通じた地方創生に関する調査研究に関する質疑応答

- B 委員 : 成果を具体的にどう活かしたいのか。
- B 研究員 : 美波町役場は門前町の再生を総合戦略に掲げているので、桜町地区の空き家を活用した都市計画といったものが考えられる。
- E 委員 : 町と連携して、例えば、空き家バンクやサテライトオフィス等をつくるといった具体的な話にはなっていないのか。

- B 研究員 : 具体的な案が今たちまち出ているわけではないが、基礎データとして県と町とで共有できているので、将来使う余地が生まれてくる可能性はあるのかなと思う。
- C 委員 : 去年、別の地区で実施した調査が、その後どう活かされたかを知りたい。
- B 研究員 : 昨年度の海陽町鞆浦地区での調査が今どう活かされているのかは把握できていない。
- D 委員 : 県民に成果をフィードバックする予定なのか。
- B 研究員 : 空き家情報をはじめプライバシーの多いデータなので、具体的にはまだ考えていない。これからの課題であると考えている。
- D 委員 : 調査を回答してくれた人にはある程度結果を伝える必要があると思う。

### 3) 調査研究「来たれ若者！にし阿波で起業！移住！交流！」に関する質疑応答

- A 委員 : 連絡会でのやり取りはメーリングリストを作るとか、掲示板的なものを利用しているのか。
- C 研究員 : フェイスブックのグループ機能を利用している。そこで会の連絡やディスカッションをしている。
- B 委員 : 移住交流と仕事づくり、どちらに重点を置いているのか。
- C 研究員 : 実際に移住していただくためには、「住」と「職」どちらも必要と考えている。
- D 委員 : 違った視点で新しいにし阿波を探すために連絡会に地域在住の外国人も加えてはどうか。
- C 研究員 : 外国人と親しい方々がいるので、その繋がりで探せるのではないかなと思う。
- C 委員 : ホームページを立ち上げた民間の方がいるということだが、具体的にどういうものを作ったのか。
- C 研究員 : ウェブサイトを立ち上げ、交流システムを構築することを目指しているが、今はテスト中で一般公開はされていない。

### 4) 徳島県内における南海地震に関する歴史資料（古文書・古記録）の調査研究に関する質疑応答

- B 委員 : 歴史資料の中で特に意外だと思うもの、特に貴重だと思われるものはなにか。
- D 研究員 : 宝永地震に関する資料はそもそも少ないのだが、中でも、小松島や川内の辺りで地盤沈下があったと記述されたものが、想定を根拠付ける資料として貴重である。昭和南海地震については広汎に調査されているが、過去に遡って今後事実が明らかになっていけば、さらにきちんとした情報になっていくのではないかと考えている。
- A 委員 : 例えば教育委員会と連携を取って、学校の授業で解説や取り組みをする予定はないのか。

○D 研究員：防災教育はこれから大事になっていくものなので、今回作った資料を、一つの手掛かりに使っていただければと思っている。内容が小学生には難しいので、中学校や高校で使われるということがあればいいと思う。また、我々が直接お話しできる機会があればいいなと考えている。

5) 「ここに住みたい」「もう一度来たい」と思わせる地域づくりのアクションをつくる  
徳島大学フューチャーセンターの活用法と有用性に関する調査研究に関する質疑応答

○C 委員：コミュニティ型のホテルをデザインされたということだが、具体的に宿泊施設ができるのか。

○E 研究員：プレワークショップ1・2で実際にベッドだけ置くホテルを神山に2つ作った。ホテルは廃材を使って足場を組み、低価格で提供できる(アフォーダブル)スタイル、かつ、既存の民宿のキッチンなどを併用しながら泊まっていただくようなスタイルを見出した。「作良家」さんの敷地内に5か所、3月20日にポートランドからの意見者と一緒に見て回り、農業のリニューアルというかたちの提案もできている。

○D 委員：神山には世界に向けて発信しているNPO法人グリーンバレーがあるので、このフューチャーセンターの試みを神山で行ったことはもったいないと思う。他の町村で行えば、そこの地域全体の活性化に繋がったと思うのだが。

○E 研究員：同意見だ。しかし、他には全部断られ、相談に乗ってくれたのが神山だった。フューチャーセンターの手法は、できるだけ早くプロトタイピングをして、実績を見える形にして理解を得ていくものなので、そのためには神山が一番早い。これをもう少し具体化し、他の市町村を巻き込むような促進効果を積み上げているところである。相乗効果を高めて、県全体をレベルアップしたいという考え方である。

○B 委員：フューチャーセンターをはじめ、地方創生に取り組む徳島大学の最終ゴールはどこに置いているのか。

○E 研究員：それは徳島大学の課題である。「つながり」でイノベーションを起こしていくのがフューチャーセンターのモデルであり、フューチャーセンターでは地域の持続・人口増に焦点を合せ、それ以外はしないと決めている。

6) 「防災文化」の発信と小・中・高・大・町行政・地域住民連携による地域の活性化策の提言に関する質疑応答

○B 委員：防災意識と伝統文化を地域にどのように役立てていくかを考え、最終的にはアクティブラーニングや地域活性化につなげていくということか。

○F 研究員：参加した学生は将来、子どもを扱う職業を選ぶことになるので、危機管理の意識の醸成は必要だと考える。

- A 委員 : 自らどのように評価しているか。
- F 研究員 : 参加学生全員に、各学生の持つ専門性、例えば看護や養護といった視点に立った内容のレポート作成と模擬授業を課し、かつ「子どもの目」で見た評価をさせた。学生はよくやっていたので、将来良い教員になると思う。
- C 委員 : 参加した学生にとっては、非常に刺激的で勉強になったと思うし、将来良い教員になるだろうと思うが、それに加えて、地域活性化にどのようにつながったかという点が不明確なので、その点をどう評価するか。
- F 研究員 : 3月5日の海陽町公民館大会において、県外出身の学生がパネラーとしてディスカッションに参加し、「県外出身者から見た海陽町」という視点で、海陽町が抱える課題について情報提供を行った。

#### 7) 食用藍の機能性成分に関する研究に関する質疑応答

- A 委員 : なぜ、ポリフェノールの添加を1.0%と1.5%としたのか。
- G 研究員 : 予備実験として、0.5刻み、つまり0.5、1.0、1.5、2.0と数値を変えて試したところ、1.0と1.5に良い傾向が見られたため、1.0と1.5を採用した。
- B 委員 : 四国大学では今まで藍の研究はされてなかったのか。
- G 研究員 : 四国大学でも、全国でもされてなかった。抗菌作用は随分前から言われているが、それを科学的に証明するものがなかったため、今回の藍に関する研究は初めての試み、先行的な取り組みであると考えている。
- D 委員 : 100グラムあたり2.41グラムというと、他の食品でいうとどれくらいの量になるのか。
- G 研究員 : 乾燥ワラビやゼンマイといった、えぐみのある食材に含まれる量と同じである。

#### 議事3「平成29年度研究テーマについての助言・提言」

消費者政策の研究・立案拠点として設置される「消費者行政新未来創造オフィス（仮称の活動に呼応したもの）」とし、広く、消費者行政・消費者教育に関する調査研究を募集することについて、各委員から了解を得た。

平成28年度 徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター  
外部評価委員会 評価結果一覧表

番号	調査研究名	(1)テーマ性, ニーズ把握	(2)研究の内容	(3)研究の活用	合計
1	徳島の高校生の進路等に関する意識調査研究	22	20	19	61
2	建物悉皆調査を通じた地方創生に関する調査研究	21	22	19	62
3	調査研究「来たれ若者！にし阿波で起業！移住！交流！」	26	25	23	74
4	徳島県内における南海地震に関する歴史資料(古文書・古記録)の調査研究	26	27	25	78
5	一億総活躍社会実現に向けた大学との連携による調査研究	24	23	24	71

※1 評価項目の視点について

(1) テーマ性, ニーズ把握

①地域課題, 地域再生等の課題解決を適切に踏まえた内容となっているか。②県内経済, 中山間地域等への波及効果・活性化が期待できるか。③今, 実施すべき必要性があるものか。

(2) 研究の内容

①創造性や新規性に富んだものか。あるいは, 新しい価値観(地域知), 可能性を広げるものか。  
②調査や検証が十分行われた内容となっているか。③大学等の高等教育機関, 非営利組織, 民間企業, 市町村, 県民等との連携協力, 協働, 参画等が得られたものか。

(3) 研究の活用

①政策立案, 政策提言への活用に繋がるものか。②実用性, 実現可能性が高いものか。③生涯学習の意義・役割・推進を果たすものか。

※2 評価基準と評価結果の公表について

(1) (2) (3) の視点ごとに各委員(6名)が5段階評価「5非常に優れている, 4優れている, 3普通, 2あまり評価できない, 1評価できない」で採点を行い, (1) (2) (3) ごとの委員全員の評価結果の小計, 全評価項目の合計, 併せて, 各委員の所見について代表的なものを公表する。

平成28年度 徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター 外部評価委員会 所見一覧表(委員名入り)

番号	調査研究名	(1)テーマ性、ニーズ把握	(2)研究の内容	(3)研究の活用
1	徳島の高校生の進路に関する意識調査研究	若者の人口流出に対する施策立案に向け、高校生の将来に関する意識を把握することに一定の意義はある。 若者の意識を探るテーマは意義深い、回答数が少ないうえ、地域に偏りが見られ、斬新性にも欠ける。 人口の社会減が続いている中で、高校生の進路に関する意識調査はタイムリーなテーマである。 若者の人口減少は、現代社会における大きな課題である。高校2年生に焦点を定め、将来への意識調査を実施し、まとめあげた点は評価が高い。社会の活力を維持するために若者人口の流出を抑える原因(要因)を調査し、適切な施策につながるよう、高校生に意識調査・研究を行ったことは評価する。	大学や県教委、学校との連携協力のもと進められている。また、オンライン調査のメリットと課題を示した点にも意味がある。 質問に工夫が足りない。定住や結婚で「なぜ」という理由にも踏み込み、より深く分析して欲しい。 インターネット上の「徳島県電子申請・届出システム」を活用した調査は、今後のアンケート調査への可能性を感じさせる。 インターネットを利用したアンケート調査は高校生にとって回答しやすい手段であるが、各高校へのPR不足であったことが否めない。 回答率が少ないのが非常に残念である。高校に直接出向くなど、回答率を上げる追い込みが欲しい。	若者の意識について、非常に目新しい知見が得られたというわけではないが、政策立案・提言に際し考慮すべき内容を示している。 オンライン調査の有効性が確認できたことは良かった。活用や活性化までは踏み込めていない。政策等、今回の意識調査を踏まえた次の展開がいまひとつ読みにくい。 対象高校生(約6,700人)に対し、回答数が432人と約6%の数値は低い。今回のデータをもって、次への展開は少々難しい感がある。 研究を1年で終わらせることなく、再度試みて欲しい。
2	建物悉皆調査を通じた地方創生に関する調査研究	建物の悉皆調査を通して、地区の実態や課題を具体的に把握するという意義はある。 研究テーマは明確だが、ニーズ分析までは至っていない。必要性や活性化への期待はある。 昨年に続き、特定地域の建物悉皆調査なので、行政的にはニーズがあるものと思われる。 過疎対策は徳島県における喫緊の課題であり、地域の求めるテーマであると考えられる。 昨年に引き続きの調査ということで、近年の人口減少等に伴う調査地区を把握する意義はあり、今後に役立てて欲しい。	大学との連携のもと、学生による丹念な調査が行われている。また、iPad利用の試行も、調査方法の工夫として評価できる。 若者の感性を地域再生につなげていくという視点や意気込みを感じる内容。 地域の人と触れ合える戸別調査は、参加した学生にとって、地方の課題を考える良いきっかけになったと思われる。 学生が自らの足で、現地を歩き調査を実施したことは評価できる。地域の人々と交わり、過疎地域の現状を把握できたことも大きな成果である。 調査表の項目が詳細であり、地区を網羅できている。地域住民の意見をもう少し入れて欲しい。	現状の把握から、これをどう政策につなげていくかの見通しはやや難しい。当該地区の住民へのフィードバックを工夫して欲しい。 過疎地区の現状と課題が浮き彫りになったが、政策提言や活性化へどうつなげていくかの具体案は乏しい。 学生の視点を地域活性化の具体策に結びつけられるかどうか、今後の課題であろう。 地域の現状を知り、地域の持つ課題を発見し、調査内容が地方創生の一助になることに期待したい。調査結果を地域へフィードバックし、移住者のニーズに応えられる空き家の利用に結びつくことを期待する。 研究・調査に留めず、町と連携して空き家バンク、危機管理等、今後につなげて欲しい。
3	調査研究「来たれ若者！にし阿波で起業！移住！交流！」	過疎・高齢化等、地域の課題解決を目指した取り組みであり、喫緊の課題に応えるものである。 テーマに斬新性はないが、ニーズ把握のためのアプローチ手法が良い。波及効果・活性化が期待できる。 移住促進は、過疎地が抱える大きなテーマであり、起業につながる仕組み作りも重要である。 にし阿波活性化に向けて、住民・市町・県・関係団体から構成される会において、課題解決へ向けて取り組んだことが評価される。 過疎化著しい西部エリアで人口減少に歯止めをかける希望的テーマであり、定住環境等把握すべきだと思う。	地域振興に向けて、地域住民、関係団体、行政が協働し、具体的なアイデアの創案やその後の連携にまで至った連絡会の取組が優れている。 地域住民と関係者が連携し課題と解決策を探っており、内容は興味深い。検証や分析も十分で、創造的である。 これを契機に行政と民間のメンバーで構成される連絡会が立ち上がったのは評価できる。 5回の会合を重ね、グループ単位で熱心な話し合いができたことが理解できる。 全5回の意見交換について、交流の場づくりはできたと思うが、今後の取り組みには具体性が無い。時間が少なかつたので仕方ないと思われる。	今回形成された地域住民・関係団体・行政等との関係性をどう維持・発展させ、政策の立案につなげていくか、今後期待したい。 「何をするか」「どう取り組むか」といった具体案が示されており、提言性や実用性に優れている。 連絡会を継続し、いろいろなアイデアを言いっぱなしにしないようフォローしていく必要がある。 様々な意見を尊重し、今後、地域の活性化や移住・交流に向けて具体的な試みに結びつけることが肝要である。にし阿波のブランド化を実現してもらいたい。 起業なのか、移住なのか、交流なのか、地域住民と書かれているが、地域住民とどう関わっていくのか？今後の課題だと思う。移住となれば空き家情報の提供等幅広い課題となるが、今後も継続しての意見交換はあっていいのではないかと。
4	徳島県内における南海地震に関する歴史資料(古文書・古記録)の調査研究	近い将来起こりうると思われる南海トラフ地震に向け、県民に過去の南海地震についての実態を知ってもらうことは意義がある。 過去の被害記録を系統的にまとめた点は意義深い。災害対策に役立つ。 地震への備えは、徳島にとって緊急な課題である。歴史から学ぶことは非常に有益と思われる。 歴史から南海地震について学ぶという大きなスケールのテーマである。 南海地震に関する歴史資料の調査と記録化は必要である。幅広く県民に周知するべきである。	各地に残っている史料を系統的に調査し、その成果を企画展や史料集・小冊子の作成等により広く県民に還元している点が評価できる。 斬新性はないが、地域の歴史資料を丹念に分析している。新しい発見もあり、興味深い。 専門家の方ならではの地道な作業を伴う優れた研究成果である。 史料調査や古文書の解読など、専門機関ならではの連携により、貴重な研究となった。 古文書解読等、手間のかかる作業であったらと思う。	南海地震に関する県民の興味関心を高めるのに有用である。また、古文書の調査という点で、生涯学習の推進にもつながると思われる。 過去の教訓から学ぶという観点から活用方法は幅広いと思う。 公文書から調査・研究した内容を誰にでも分かり易い形で小冊子にまとめられており、学校の教材等にも活用できる。 貴重な研究成果を冊子とし、分かり易く県民へ周知できるものにまで作り上げたことは高い評価が得られる。過去に学び未来へつなぐ大きな成果が見られるこの研究は、徳島県民にとっても大変貴重なものである。 冊子化されており、小中高生にも授業として活用できるよう工夫されている点が優れている。今後も幅広く公開され、地震の防災や減災に役立ててもらいたい。また今回新発見した史料調査についても可能な限り確認を進めていただきたい。
5	一億総活躍社会実現に向けた大学との連携による調査研究	地域づくり、防災文化の発信、食育の機能など、いずれの研究も徳島県の課題を踏まえ、その解決につながるものが期待されるものである。 テーマ的には地域に役立つものが多いが、「防災文化」は焦点がぼやけている印象がある。 東京オリパラのエンブレムに「ジャンブルー」が取り入れられたのを機に、徳島の藍をブランド化する動きが広がってきており、食の分野での活用を機能的評価で後押しする四国大学のテーマは特にタイムリーである。 各大学のテーマ設定については、非常に興味・関心の高いものであると考える。特に、食育の研究は、産業と健康を結びつけることへの期待が大きい。 それぞれの大学ともによく考え込まれている。	徳島大学の研究はアプローチ手法が新規で興味深い。四国大学の研究は新たな価値を創造するものである。 食育の研究は珍しく、内容も興味深かった。 徳島文理大学の学生さんの研究は、フィールドワークをする中で地方活性化について学ぶことができ、興味深く取り組んだのではないかとと思われる。 「防災文化」の発信に関しては、大学の単位取得上の講座としての域と考えられる。「フューチャーセンター活用法」からは、地域に求められるセンター像があまり見えてこない。 どの内容も多くの時間が費やされており、熟考されている。今後の実践に期待したい。	いずれの研究も政策への提言や実用につながる一定の成果を得ており、継続的な取組を期待したい。 今後の地域づくりに生かせるものばかりだが、どう連携して取り組むかは課題が多い。 徳島大学の研究は、今後実際に成果があがることを期待される。四国大学の藍の機能性成分に関する研究は実用性大であろう。 「食育の研究」の成果には、今後大きな展開が予想される。阿波藍の活用が「食」の分野へと広がることに評価したい。3大学からの研究報告は、それぞれに興味深いものであるが、特に「食育の研究」は実験を伴うもので、この研究の成果は徳島県の産産業そのものに、大きな一石を投じるであろうと思われる。 オリンピックに向けて藍をPRする良い機会に食育としても期待が持たれる。沖縄での学会の反応が楽しみである。食育について今後の利活用が期待される。